

消し文様が描かれる。かの地では撚糸文地文が一般的だが、21の個体は竹管条線を地文としている。波状口縁から垂下する隆帯の上下に、中央をくぼませたスプーン状の張り付け文がみられるが、これは同時期の土偶の掌の表現に酷似する。

今回、宮戸Ⅰb式を門前式直後の土器群と考えてこの位置に置いたが、実際には若干の時間幅があるかもしれない。

最後に本群土器の時期であるが、綱取系の土器を含まないため、その位置づけは微妙である。

とりあえず堀之内Ⅰ式生成期と呼んだが、包含層出土の土器を軸に組み立てているため、個別の土器にはⅠ段階下るものも含まれるかも知れず、後続のⅢ群とのブランクを埋める意味でも、若干の時間幅を想定す

V 群土器について

縄文時代後期前葉、堀之内Ⅱ式に当たる土器群である。量は少ないが、遺構単位での資料が得られた。

VA-1は朝顔形深鉢である。文様系列（時間系列ではない）により3類型に分類した。

Ⅰa類は集合沈線文の伝統を残す土器である。30はこのタイプであろう。29は集合沈線文のみによって三角形区画を描出するもので、群馬県松井田町行田梅木平遺跡表採資料中に類例を見ることができる。堀之内Ⅱ式中段階以降、Ⅰb類の区画文内部を重圈文的に充填する手法が一般化するが、第9号住居跡例はこれに先行するものであろう。

Ⅰb類は三角形区画文の土器である。32は口縁下に紐線文が巡り、胴部文様帯との間が1条の沈線で区画される。31は口縁下に紐線文が巡らず、無文地に8の字状貼付文だけが付される。

Ⅰc類はより複雑な幾何文を描くもので、大きく分けて二通りの系統が存在する。

34は三角形区画間に楕円や入り組み状のモチーフが組み合わせられ、空隙に充填文が挿入されて煩雑な構成をとる。

南西関東における類例が早くから注目されており、

るのが無難であるかもしれない。ここで取り上げたような沈線文主体の土器群にあっては、破片レベルで両者を区別するのは至難である。

なお、沈線主体である点は広義の下北原式に似るが、土器の顔ぶれはあきらかに異なっており、文化の接触地域としての個性（矛盾するようだが）がうかがわれる。

なお、第1遺物包含層からはⅠc類のうち11の粗製土器が出土している。胴張りで、口縁下に無文帯を持ち、胴部との境にたが状の隆帯を巡らす土器で、あきらかに福島～栃木に分布する牛蛭式につらなるものである。口縁下に突出する舌状の突起が失われている点が新しい要素とみとめられよう。

長野県御代田町滝沢遺跡にまとまった資料が多く見られるが、千曲川水系の同時期の遺跡に類例を見出しがたく、分布の中心はむしろ群馬県側であろう。

南三十稲葉式との接触域に生じる一群であり、上越国境を中心に分布し、新潟県下に客体的に存在する堀之内Ⅱ式の破片資料には、必ずといっていいほどこのタイプの幾何文がともなっている。

35は横方向のJ字文・紡錘文を描くもので、堀之内Ⅱ式の上下を区画された胴部文様帯に、称名寺系J字文を閉じ込めたものである。

横浜市川和向原遺跡や、東京都日暮里延命院貝塚にみられるJ字連繫文の土器に近いが、縦位の区画帯が横方向の流れを遮断し、横倒しの特異な単位文を生成している。

いずれにせよ、下北原式分布圏における堀之内Ⅱ式段階の土器であることは確かであろう。胴部から口縁への強烈な張り出しも、これを裏付けている。

VA-2は胴部中段にくびれを持つ深鉢である。胴下半部に屈曲を持ち、口縁は軽微に内屈している。

南三十稲葉式の流れを引く器形であることは一目瞭然であり、口縁の集合沈線、波状口縁の波頂部から垂

下する縦位区画帯、前出VA-1類と共通の胴部文様と、多くの要素がこれを裏付けている。

同心円文や横楕円文を斜位の平行沈線が断ち切る直弧文的な文様は、与野市神明遺跡、群馬県藤岡市北山遺跡ほかに類例をみることができる。また、南三十稲葉的な器形は、51の加曾利B1式に受け継がれている。

VB群は広い意味での下北原式の一列で、単沈線によるJ字文やH字文を描き、主モチーフ間に多条の沈線を垂下させる土器である。

称名寺系文様の流れに属し、堀之内1式の初頭から存在する。

石井寛氏はこのタイプの土器を「相模沈線文土器」と呼び、下北原式の名称を、関東地方南西部における堀之内1式並行土器群を指すものとして用いている。

阿部芳郎氏も基本的には同じ立場ながら、下北原式のイメージとしてこのタイプの土器をより前面に押し立てており、現在下北原式と言う場合、こちらの用法が一般化しているようだ。

関東南西部に特有のもので、他地域にあっても個体そのものや影響関係の抽出が容易な土器であり、このタイプをもって「狭義の下北原式」とするのは妥当であるように思われる。

入波沢西遺跡グリッド出土遺物中に2個体が存在するが、いずれも口縁部を欠失しているため、時期を特定することが困難である。

比較的スマートな36は堀之内1式段階に属する可能性があるが、37は底部から胴部にかけて急激に開き、胴部中段でS字に屈曲して口縁に向かうメリハリの効いた器形から、堀之内2式段階のものであるように思われる。

VCは信州の堀之内1～2式の主体をなす浅鉢形土器で、関東でもしばしば土器組成の一角をなす。

浅いボウル状の体部に、外反する長大な頸部が付される。

胴部文様帯はJ字連繋文が一貫して存続する。他方堀之内1的なわらび手文・集合沈線文も存在するが、

浅鉢器形ゆえの文様帯下端閉塞という施文原則にそぐわないためか、主流とはなり得ていない。

一方で、初期においては、わらび手文の下端を強引に連繋させた南東北的な文様も出現している。

本類のJ字連繋文は、いわゆる小仙塚類型に出自するものであるが、連繋文の上下に生じる空隙に三角形の充填文を挿入するのが特徴となっている。

38の土器の胴部に描かれた紡錘文の、斜行する連繋文側の描線が二重になっているのも、充填文を意識していることであろう。

この充填手法は、称名寺式に由来しており、古くは加曾利EIV式から中期末の梶山類深鉢にまで遡ることができる。

また、時期も系列も異なるが、IIIE類26の大柄なJ字文と、空隙を埋める充填文の扱いはより称名寺式に近いものとなっており、この点が仙台湾に分布するこの種の土器を古くも新しくも見せている。

同様のJ字連繋文は、その他、東北地方北部の十腰内I式に先行する土器群にも影響を与えている。

このJ字連繋+充填文の土器群は、関東平野をとりまくようにして東北日本一帯にモザイク状に分布し、客体的な要素として堀之内1式分布圏にもしばしば侵入する。

やがて、集合沈線化の究極としての器面の画一化により堀之内1式が行き詰まりを迎えると、朝顔形深鉢の胴部文様に採用され、堀之内2式のカラーを堂々と主張するに至るのである。

堀之内2式の成立は、異系統土器群のバイパスを経由した称名寺の文様構造のリバイバルと考えられ、関東における土器変遷史の中の、ひとつの「鬼子」なのである。

41の無文の鉢は、43の注口土器とともに、信州における精製土器の無文化の傾向を示すものである。

頸部と体部の調整手法の違いが、暗に文様帯の意識をもって作られていることを示しているが、無文化することによって37の器形との類似が際立っている。

最後に、編年的位置付けについて触れておきたい。

堀之内2式の編年については既に阿部芳郎氏、石井寛氏、今橋浩一氏、小川和博氏、綿田弘美氏らの論考が存在し、三段階～五(七)段階の細分が試みられた。

五段階以上の細分については、型式編年というより「形相変遷(小川1984)」としての性格が強いものと思われるため、ここでは全体を三段階に分ける立場から話をはじめたい。

該期の住居跡は、入波沢西遺跡・入波沢東遺跡から各一軒ずつ検出されたが、出土土器の様相は微妙に異なっている。

すなわち、入波沢西遺跡第9号住居跡が古段階、入波沢東遺跡第5号住居跡出土遺物の一部が中段階に相当するものとみられる。

今回の調査を通して、新段階に該当する資料を遺構単位で確認することはできなかった。

南関東域を中心としてそれなりに資料の蓄積がすすんではいるものの、この細別の土器は、遺構単位の資料に極めて乏しい。

入波沢東遺跡第5号住居跡からはパネル文の堀之内2式中段階と、平行沈線間に区切り文が確立した加曾利B1式が出土した。

第113図に示した両型式の分布状況から、出土地点に若干の偏りがみられるものの、おおむね連続的な廃

棄行為が行われたものであろう。

ただ、両者の間に堀之内2式新段階を介在させた場合、当該住居跡に対する廃棄行為にブランクを想定せざるを得なくなる。

秋田かな子氏は堀之内2式終末の土器群として、神奈川県伊勢原市下北原遺跡14号住出土資料を提示し、加曾利B的な横帯文に堀之内2式的な8の字状貼付文・紐線文を伴う土器をこの段階に含めた。

さらに、これに並行して存在する異系列として石神類型を提示、その小クランク状のモチーフの精製深鉢への導入を通して、次段階に加曾利B1式の区切り文が生成されたとした。

この見解はわれわれに二つの問題を投げかける。

まず、単純な時間的前後関係。区切り文をとまなう横位平行沈線文の出現＝加曾利B式の成立として、それはほんとうに、石神類型段階には存在しないのか。

結論から述べるなら、それは堀之内2式新段階の組成中に既に存在していると考えられる。

もうひとつは、石神類型なるものの身分証明である。それは、堀之内2式分布圏の中に、いかなる脈絡のもとで発生し、同時期の周辺諸型式(とりあえずは北海道を含む東日本一帯)の中で、どのような戸籍上の位置を占めているのか。

縄文後期中葉土器群の生成について

そこで、大幅に視点を変えて、東北日本の後期前葉を中心とした土器群を、関東の堀之内編年の立場から再構成する中で、加曾利B1式(あくまでもここでは横帯文+区切り文)成立の周辺事情について概観してみたい。

ここでは「××式」という型式名称は、ひとまず時間的序列としての概念からは切り離され、「類型」「系列」と同列の土器のタイプに限定して用いられる。代わって、時間階梯を表わす語としては、「××(式)段階」を用いる。

本稿の段階設定は後期初頭部分を除いて、あくまで堀之内2式を軸とする。したがって、「堀之内2式新段階

の加曾利B1式」という言いまわしも、ここでは成立する。

「学史軽視」の謗りも免れまいが、別個の学史的背景のもと分類整理されてきた資料群を、一時的にせよ同一のテーブルの上で操作するには、必要な手続きなのである。

また、「連鎖」ということばを頻繁に用いるが、これは「共時性を想定される相似」である。橋本勉氏の「住居跡連鎖」とはいくぶん違った意味で用いており、指向性を持った影響・被影響のイメージから自由であるための造語である。

なお、経時的变化の方向性を共有するような現象